

思い出草・二



和田陽平

竹さん

雑草・雑木が好きなのは親譲りかも知れない。父や母は庭師が樹を剪定するのを好まなかった。

「余計な枝は自然に枯れるものだよ」

樹は伸びるに任せ、雑草も好きなのは抜かずに残した。

夏はホタルブクロ、ツユクサ、カヤツリグサが咲き、秋はヨメナ、ノジギク、ツリガネニンジンなどが庭を彩った。

庭の掃除には時々、土方の竹さんが来た。竹さんは穏やかな老人で、好みをよく弁えて、丁寧に草を抜き、冬は庭の小径に藁を敷いた。幼い私は、どういう訳か竹さんが好きで、竹さんが来ると一日中、そはに食っついて離れなかった。竹さんもまた、にこにこ話相手になって呉れた。私は母に、わざわざお弁当を作って貰い、庭の縁台に並んで仲よく食事をした。竹さんの大きな弁当の真ん中には、梅干が入っていた。

私達が一体、どんな話を交したのか。情ないことに全く思

い出せない。弁当の梅干なんかよりも、その時の話の、ほん
の一かけらでも思い出せたら、どんなにかいいのに。

ビネ・テストのなかの、文章の不合理的問題に、家か
ら公園までの道は下り坂ばかりです、公園から家までの帰り
道も下り坂ばかりです、というのがあつた。まことに人の一生
は天上界から俗界への下り坂ばかり。低俗な世界に沈淪して
いる現在の私には、遙か昔の高地の言葉は覚えていてはなら
ないものなのだろう。

アイスクリーム

夕涼み、一家揃つての伊勢佐木町の帰り道、どうか吉田橋
を渡りますようにと、心ひそかに念じていたのであつた。橋を渡
れば馬車道の、風月堂でアイスクリームを飲むことになるか
らである。ピカピカ光る真鍮の扇風機が首を振り、濃緑に白
い筋の模様の入った大理石のテーブルで食べるアイスクリー
ムを、当時の私は、世の中にこんな旨いものは二つとない
と、固く信じていた。

その頃のアイスクリームは、今のそれとは全く異質のもの
であつた。この頃、私は百科辞典で、たまたまアイスクリー

ムの項目を読み、一かたならず仰天し、かつ、今のものが昔
のそれと異質である所以を了解した。現在の工業生産のアイ
スクリームの原料のなかに、何とアルギン酸とアラビア護膜
！ 道理で矢鱈にべたべたする筈である。私のアイスクリー
ムは遠い昔に姿を消した。

秋の一日、母は私を連れて、東京行きの汽車を待つ間、横
浜ステーションの食堂に入つた。当時の横浜ステーションは、今
の桜木町駅の所にあつて、それは汽笛一声新橋駅——汐留に
あつた——と全く同型の、中央の玄関を挟んだ左右相称の石
造二階建て、まことに風格のある建物であつた。駅前の広場
には、日本最古の高雅な西洋式噴水があり、広場を隔てた大
岡川の河べりには、西洋料理店川村屋があつた。駅の向つて
左側には、機関車を回れ右させる、かままわしがあり、円い
台に乗せた機関車を、二人の職員が、よいしょよいしょと回
すのを、私はいつも、柵の柱の間に首を突っ込んで、飽きず
に眺めるのであつた。

さて、秋の一日、母は私を連れて、駅の食堂に入り、何が
欲しいの、と私に聞いた。欲しいのは世界一の珍味にきまっ
てる。

「アイスクリーム」

所が当時は、アイスクリームは夏の盛りしかなかつた。しよげ返つた私に、ボーイが機転をきかせて、

「坊っちゃん、アイスクリームはございませんが、おいしいシュークリームは如何ですか」

私は忽ちそれに乗せられて、

「うん。それがいい。シュークリーム」

私は大喜びでシュークリームを食べた。

悼心賦

悼心などという言葉はないかも知れない。

.....

鬱々と屈託した日々を送つた学生の頃、毎夜、床のなかで読むグリム童話に、いささかの心の安らぎを得たことがあつた。金田鬼一訳の岩波文庫五冊を読み終えた日に、何気なく跋文を読み、その末尾に到つて私は思いもよらず、ひとかたならぬ衝撃を受け、涙をとどめることが出来なかつた。

金田氏よ。ここに無断で引用致しますことを、どうぞ御ゆるし下さい。私は、どうしても、皆さんに伝え度いのです。

それは、次のようなものであつた。

幼くして逝きたる二人の愛児

九美ちゃんと九一の霊に

この書をささぐ

この世にては相見ざりし姉と弟、今はひとつの墓のうちに相擁してねむる。暮暁の青木の実、紅累累たり。

櫻路は姉にささげよおとほとけ

父 鬼一

*

父を呼ぶこえもきこえず母を呼ぶこえも

きこえず秋の日暮るる

母 たか

物の本を読んで涙を流したのは、あとにもさきにも、この時だけであつた。

.....

私の弟は小学校一年の、夏休みの終りの八月三十一日に発病し、翌る一日の夜に、あつけなく死んだ。疫痢であつた。

一日の朝、小康を得た時、医者は「或は助かるかも知れないが、引き付けが来たら、もう駄目ですよ」と言つた。眠っている弟の枕元で、好きなことは何でもしてやるから、どう

か、なおっておくれと、心のなかで只管願った甲斐もなく、
昼、突然烈しい痙攣が起って昏睡状態に陥り、夜に息を引き
取った。もっと可愛がってやればよかった。私は無限の後悔
に襲われた。

法名 釈智潤童子

気丈な母は人前では涙を見せなかったが、気が狂う程悲し
かったに違いない。弟の学用品、玩具、絵本そのほか、思い
起させるものすべてを焼き捨てた。私はそれを手伝いなが
ら、仮名文字合せの木片一枚と、弟が白い木綿糸で輪に通し
た数珠玉の実を、そっと拾い取って、大切に仕舞いこんだ。

.....

マーガレット・オギルビイは、ジェイムズ・バリーが母の
想い出を綴った作品である。

バリーの兄さんは幼くて死んだ。母親は筆笥の抽出しに仕
舞った形見の服を取り出して眺めては、幼いバリーに、兄さ
んはお前にそっくりだったが、お前よりはずっといい子だっ
たと、嘆くのが常であった。バリーは自分が兄と瓜二つと聞
いて、母に兄の姿を見せて喜ばせ度い一心で、或る黄昏時、
ひそかに兄の形見の服を着て、突然、母の前に立った。

.....
幼い子供の死ほど、哀れで悲しく、やり切れないものはな
い。幼くて死んだ子は、どの子もみんな、いい子達である。
仏様や神様は、いい子を膝に呼び寄せるのであろうか。

はやし言葉

子供のはやし言葉には色いろある。私の子供の頃には、男
の子と女の子が仲よく遊んでいると、

女と男と豆炒り

炒っても炒っても炒り切れない

こんなのはやし言葉がなくなつたのは、仕合せである。

.....

いくじなしに対して、子供達は容赦がない。

泣き虫毛虫、挟んで捨てろ

.....

泣いていた子が、急に機嫌を直して笑ったりすると、
今泣いた鴉が、もう笑った

.....

自慢する奴をはやすのに、

お前は偉いよチャンゴノチャンだよ

剣術使いの癪だらけだよ

意味は極めて明らかだけれども、チャンゴノチャンは何だか分らない。

.....
エンガチヨ、エンガチヨ

これは、馬糞を手摺みにしたり、死んだひき蛙をつまみあげたり、とに角、汚いことをした奴を、はやす言葉だが、さて、エンガチヨの意味が分らないので父に聞いてみた。父も、何だか分らんなあ、暫く考えていたが、

「因果のちようかな」

と眩いた。千早振るではないけれど、エンガは因果かも知れないが、チヨは今もって、何だか分らない。広辞苑にもエンガチヨは載っていない。

孫に聞いてみたら、此の頃の子供はエンガチヨとは言わないで、ベンベンとか、ベベーンとか言うらしい。これも何だか全く分らない。

誘っても遊び仲間に入らない旋毛曲りをはやすのに

いやならよしゃがれ

よしべの子んなれ

べんべん弾き度きや

芸者の子んなれ

この、はやし言葉は中勘助の銀の匙にも載っている。中氏の生年から推算すれば、それは明治二十年代のことであり、私の子供時代は大正のはじめだから、ずい分長く続いたものである。だが、私の息子達の時代——昭和の二十年代——には、文句はすっかり変っていた。

いやなら新橋があらがら

お前のとつちゃんくるま曳き

「いやなら新橋」とは起し得て甚だ妙であって、「よしべの子んなれ」よりも、作柄が遙かに優れているようである。第一、格調が高い。如何なる天才児の作であろうか。

(明星大学)